

れかの密告があったからだ。

それとも、その後ソ連の独裁体制の中で、密告政治は所長自身の不都合をば捕虜を悪者に仕立てて点数を稼ぎ、自身の不都合を埋めた策略だったのか。作業終わった後、わざわざ厩舎に足を運び、夕闇迫るのを知悉しての労働の追加作業を命じた。そのあげく凍傷を生み、そしてそのまたあげく懲罰大隊へ転属さして死のふちへ追いついたのだ。懲罰大隊へ送るまでの計算を入れての追加作業命令であったのだろうか。あまりにも不合理の多い虜囚生活だったのだ。

私の抑留

岐阜県 山田好美

私の終戦地は満州の鞍山でした。

ソ連軍より製鋼所の解体作業が申し込まれ、解体終了後日本へ帰すとのことであった。みんな黙々として作業をした。

解体も済み全部貨車へ積み込んだある晩のこと、「みんな持てるだけのものを持って集まれ」と伝言がくる。みんな帰れると思ひ集合する。「各自食糧を持って貨車に乗れ。」との指示が出る。乾パン、缶詰を持てるだけ持って貨車に乗る。列車は走り出すが西も東もわからない。朝になり列車がとまる。

水の補給連絡がきて貨車の扉を開けて外に出る。現地召集の一人が「あ、新京だ、方向が違う」と叫ぶ。ばらばらと四、五人が貨車から離れて隠れる。貨車の上では兵隊たちが逃げまどう小隊をねらい射ちしている。将校たちはハンケチを標的にして射撃練習をしている。この時点で、逃げるより行くところまでゆけと心を決める。

貨車の扉は旋錠され、走り出す。暗くて昼夜の別もわからない。一人、二人と小刀で穴をあけにかかる。ただし進行中だけの仕事である。停車中は兵隊がうるさい。ソ連領内へ入ったらしいが、停車しても扉は旋錠されたままである。ソ連人が列車に近寄ってくるのが穴から見える。手まねで時計と煙草や食べ物と交換している者がいる。しばらく走って停車したとき、扉の錠がはずされ、

兵隊たちが何やら叫んでいる。二、三人おりて出る。黒パンが三本ずつ配られた。停車時間の伝言は日本とソ連の軍医の筆談によって伝えられる。三十分と三分の違いがたびたびあった。三十分停車と全部に伝わり終わるころ、兵隊たちが大声を出し手を貨車の方へと振り出す。発車である。全員おりて用を済ますつもりが、だめだ。用便途中の者もあわてて貨車へ乗り込み、進行中友の手を借り、尻を出して用便を済ます者もいた。

持ってきた乾パンもなくなり、兵隊のくれた黒パンをたよりだったが、一部のもので食べてしまい、すでになかった。仲のよい者同士で少量の残り物を分けて食べているしかなかった。停車するたびに「用便をしろ、水を汲め。」の伝言が早くなり、兵隊たちの動きによって私たちも長い短い停車を感じとるようになった。黒パンの支給量によりどのくらい停車時間があるのか、わかるようにもなってきた。たばこ一箱ほどが一食分だということもわかってきた。停車するたび水筒に水の補給を欠かさぬように努める。もう黒パンだけがたよりだった。停車中に貨車のかげに入ると兵隊が怒る。みな一列になって

用便をする。何日か過ぎて下車の伝言がくる。身体検査の末、着替えと毛布だけで収容所へ入れられる。

ここはイランとの国境近くだと言う。作業は部落づくりの土方作業であった。収容所の周りには有刺鉄線が四回り鉄条網のごとく張っており、二か所の望楼があつて、昼夜兵隊が見張っていた。出入り口には昼夜勤務で兵隊と将校、下士官がいる。西も東もわからぬ土地で逃げ出す者もいなくなるに、大変な警備であつた。

日曜日には鉄線の門を掘り返しの作業が行われた。足跡のつきやすくするとのことだ。

十二月も近いというのに二十五度ほどの気温である。たまたま風土病の患者となりタシケントへ移される。ここの作業は工場内の雑用であつた。

食事はパンのほかに飯ごうのふたに一杯のスープで、中身は酸っぱいキャベツの漬け物である。塩出ししても塩分を出しきれないとの話である。ヤギ、スッポン等の肉類も全部塩漬けのものばかりだった。週に一度飯ごうのおかず入れに一杯の白飯、少量の砂糖があつた。炊事係が前に蓄えておいての配慮だった。

昼食と帰りに兵隊が呼びにくる。「こっちへ来い」「食事に行く」「帰る」ということは早く覚えた。一人だけソ連人の中で作業させられたのと若さで、日常語を早く覚えることができて幸いした。

この土地でも芸者だけは通じる。鋳物は釣りの仕事をしながら話し合う。よその国のいいことをしゃべっていると牢屋入りだと言う。だが監督の目を盗んでは日本のことを聞きたがる。都合の悪いことは全部モスクワに聞けと言う。

ありがたいことには、氣候が日本と同じよう四季があった。だが雨、雪は十指を折るぐらいしか年間降らぬ乾燥地帯である。工場内の編成は、主要ポストを共産党員で確保して監視体制を整えていた。

ソ連人の仕事ぶりは私らでは見ていられないほどだった。八時より五時までただ現場にいて時間をつぶすだけのように見える。ノルマー〇〇%をこなせば衣食住に苦勞はないそうである。

現地人に白いパンはないかと聞くと、あると言う。市場では高く買えない。食べたかったら病人になれと言

う。作業に必要な物は安く買えるが、外出着、楽器、娯楽品類は高く買えぬ。外出着が作業着の何十倍もすると言っていた。私らが貨車からおりたとき、時計、トラップ、軍刀その他目ぼしいものを没収したいきさつがわかってきた。

収容所内では満州青年共産同盟に加入していた者たちが頭を上げにかかった。指導者がアクチーブを募り、作業終了後に集会を開きつるし上げがたびたび行われるようになってきた。常時ゲーペーと呼ぶ政治局員がアクチーブの頭と連絡をとりながら、共産思想の徹底をはかっていた。

作業所へ五人ほどが増員で配置されて来た。監督は私に作業長をやれと言う。たまたま収容所より通訳として作業現場を回っている者が訪ねてきたが、監督も兵隊も、ここは通訳は要らないと言って、帰してしまった。日常の作業に必要な言葉を私なりに覚えていたと見える。

いつ帰れるかわからない日々を送る毎日であった。種々の人種が寄り合っている国である。個人的には親切

にしてくれるが、集団になるとモスクワである。帰化問題を政治局員に頼んだが、日本人はみんな日本へ帰りソ連のことを見たまま聞いたまま伝えてほしいと断られる。なにはともあれ、帰る日の来るまで耐えて生き抜くより仕方がなかった。

思い出の抑留記

和歌山県 嘉成 一郎

新京郊外の孟家屯を出発した列車は途中国境より引き揚げの開拓団の人々を乗せた列車と出会い、お互いに元気でねと挨拶を交わしながら黒河に着いた。

ここで河を渡る舟に穀物類を積み込む使役をさせられた上に、ブラゴエシチエンスクに渡り、さらに乗りついた列車はいつの間にか虜囚列車ということになっていった。あるときは列車からおりて列車の後押しをしたり、駅で何時間も停車を繰り返しながらゴビの砂漠を南下して、五十数日ぶりにアングレンという人間の住みそうも

ない荒野の中に放り出されたのです。

平素健康体であった私の身体も列車に乗せられてからマラリヤに冒されたのか、下車してからすぐに半分地下になっている天幕づくりの病室に入り、板ベットに寝かされた。

何も食べることもできない高熱に苦しみながら数日が経過した。意識の底でここが我が人生の終点であるのかと思いつながらベットで男泣きに泣いたものである。

なげなしの二十五ルーブルを全部はたいて、ソ連の軍医に頼んで買ってきてもらった小さなリンゴを一食ごとに二個ずつを食べて、二十個を食べて終わったところにやっと少し元気を取り戻したものです。

やがて退室できるようになり、十分に回復したものとさえ言えないまでも松岡小隊長らに迎えられた。外に出れば二百人ほど入ることのできる幕舎が十棟ほど並んでいた。

幕舎の中は両側に二階段の板ベットがあり、犬小屋の犬のように抑留の同胞戦友たちが顔を出して迎えてくれました。